



Suigara-yama_OoazaHyo(Kyoko_Umino)

2005-01-26

鈴はさやふる...



Navigation

[Previous 月](#)
[Next 月](#)
[Today](#)
[Archives](#)
[Admin Area](#)

Categories

[All](#)
[General](#)

灰皿町の本

●[幻想小説『なめくじキーホルダー』](#) 清水鱗造

●[「週刊読書人」詩時評一九九二-一九九三年](#) 清水鱗造批評集 第二分冊

Search

彼に数ヶ月ぶりに会った。生の深いところに触れてきた（あるいは渡ってきた）ことからくるのだろう。やさしげに、うれしげに、ときにわらい、だがおおむね音のない世界のできことだった、から疎通が困難だったこともある、が、それはこの次で、彼がいまあること、その重みというのだろうか、わたしがしていたどんな彼よりもやわらかな、澄んだ、まなざしになっていた、から、それが距離となっていた、とかんじたのかも知れない。わたしは近づきたかった、彼もまたさしのべて。彼が以前薦めてくれた『梁塵秘抄』の一節が重なるのだった。「遊びをせんとや生れけむ／戯れせんとや生れけん／遊ぶ子供の声聞けば／我が身さへこそゆるがるれ」。わたしの知るかつてから、いまもまた、それはわたしが彼からうける印象そのものだったから。いまもまた、だからこそ重いのだ。音のない世界、といったが、たがいに触れ合う、触れ合おうとすることで、音たちは見えてくるものが多い。だから会話のなさが原因なのではない。それはわたしの軽さが原因なのかも知れない。生の深淵がふっと脇をかすめた、というほどもなく、ただ遠い息づかいを、風のなかに聞いたのだ。ここで、このわたしの生の場所で。

彼とまたしばらく会えない。別れ際、握手をした。それでもなにかが通ったのだ。彼としばらく会えない。わたしは祈ることができない、祈ることをしらない。あの重さに対して、軽いわたし、生を通り過ぎんばかりのわたしが、彼になにをいえばよいというのか。なつかしそうに（つまり人恋しげに）、わたしを、というより、わたしをふくむすべての世界をみつめる、彼のまなざしがいたいほどだった。数ヶ月ぶりに彼に会った。音のないわらいから、鈴の音がひびいてくる。「鈴は亮（さや）振る藤太巫（みこ）目より上（かみ）にぞ鈴は振る／ゆらゆらと振り上げて目より下（しも）にて鈴振れば／懈怠（けたい）なりとて ゆゆし 神腹立ちたまふ」（『梁塵秘抄』）。

00:52:17 - umikyon - No comments

Login

ログインID:

パスワード:

このPCを他の人と共用する

Powered by

